

主体的・対話的で深い学びができる生徒の育成  
～問題解決的な道徳科によるカリキュラム・マネジメントの構築～

麗澤大学 鈴木明雄

【要旨】

新しい道徳科では、主体的・対話的で深い学びが実施され、カリキュラム・マネジメントを重視した学校経営の開発・充実が求められている。本論は、生徒の主体性の育成を基盤に、道徳科と各教科等の汎用的なカリキュラム・マネジメントを約8年間にわたり開発・改善してきた中学校との研究実践である。

生徒が、主体的に自分で考え、仲間と話し合い、確かな価値観を抱き、人間としての生き方を追求する必要が学校経営上求められた。そこで「飛鳥中学校問題解決型4ステップ学習指導過程」を開発し、道徳科と各教科等とで改善を繰り返し、成果を得ることができた。現在、道徳科では、教材の主人公等を自分事として真剣に考え、仲間と議論しながら、多面的多角的に自分の考えを深め広げている。また粘り強く自ら課題を解決しながら、道徳的諸価値を自らの価値観として統合し、実践していく姿が見えている。

キーワード：主体性 主体的・対話的で深い学び カリキュラム・マネジメント  
メタ認知

## 第1章 問題の所在と研究目的

### 第1節 子供たちの幸福感を育てる新しい道徳科

小学校・中学校で新しく導入された道徳科について、その趣旨と内容について、各学校は、生徒や保護者・地域社会にどのように説明し、協力要請を行っているのだろうか。

新しい学習指導要領では、文部科学省の中央教育審議会答申<sup>(1)</sup>等を踏まえ、社会に開かれた教育課程を目指している。よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な知識や力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現である。そして生きる力を基盤に、子供一人一人が**幸せ感（Well-Being）**を持続できるよりよい社会づくりという指針が求められている。根拠としては、「実生活において皆が生きやすくなるよう働くことが実感されることは、児童生徒が人生を幸せにより良く生きようとする意欲を育てる上でも大きな意義がある」<sup>(2)</sup>「予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていけるようにする」<sup>(3)</sup>等が明記されている。このことは児童・生徒の育成すべき資質・能力を3点「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」として、主体的・対話的で深い学びという方法を新しい学習指導要領のキーワードとして示された。

生きる力は、確かな学力（知）・豊かな心（徳）・健やかな体（体）を目指す継続している教育理念であり、特に新しい道徳科では、主体的・対話的で深い学びが先行実施され、各教科等との汎用的なカリキュラム・マネジメントを重視した学校経営の開発・工夫が急務である。心身を自ら鍛え、生涯充実して生きて、幸せ感を継続していく生涯100歳の人生設計を視野にいたした教育である。

道徳が教科になり戦後初めて教科書<sup>(4)</sup>が作られた。道徳科の授業では、例えば読み物教材で、主人公について「なぜ、このように考えたのか」と自分事として真剣に考え、仲間と議論しながら「なるほど異なる意見も大切だ」と多面的多角的に自分の考えを広げ、「自分ならこう実行したい」と生活の問題を発見し、粘り強く自ら解決していく。人間の強さや気高さについても、弱さや醜さをもつ自然性も真剣に考え、ただ感動するだけではない確かな思考を学びの中で継続する。そして子供それぞれが熟考した道徳的な多様な価値を道徳的な価値観として自ら統合し、定着を図っていく。更には多様な体験を通して、実際に実践して気付く学びを深める授業も工夫していくことが大切である。

以上、道徳科は、新しい教育が目指す教育を基に、未来を担う人間育成の観点から先行実施しており、問題解決的な道徳科によるカリキュラム・マネジメントの構築により、主体的・対話的で深い学びができる生徒の育成を研究の目的とした。

## 第2節 道徳性の育成はAIを活用した未来の日本を支える教育

今、Society（ソサイアティ＝社会）という言葉が注目されている。福沢諭吉は明治初期に人間交際と訳し、社会と人との関係性の大切さを語った。人間は、狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）と切り拓いて来たが、我が国が目指すべき未来社会の姿として、Society 5.0（超スマート社会）という第5期科学技術基本計画が提唱されている。経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心社会の実現と言える。今、子供たちと共に目指す日本の学校では、人間尊重の精神を基盤に、道徳科が推奨する「考え、議論する学習」を大切に、未来社会の創造を見据えた学習を積極的に展開している。このような新しい日本や充実して生きていく子供たちを育てるため、道徳科の特質である自己を見つめ、人間としての生き方についての考えを深める学習が大切と考えられているのである。2021（令和3）年度、新しく中学校学習指導要領が完全実施となる。その理念や指導内容・方法を分かり易く紹介していくことが求められる。特に道徳科はすでに2017（平成29）年3月に「特別の教科 道徳」として告示<sup>(5)</sup>され、先行実施されている。広い視野から多面的・多角的に考え、対話的なペア学習やグループ学習を工夫し、考え、議論し、主体性を育てる機能として、他教科等をよりよく改善する役割も期待されている。また通知表等の所見を通して、指導と評価の一体化を図った新しい道徳の評価を生徒や保護者に示す必要もある。一方学習指導要領の指導理念は、生きる力を基盤に、対話的な学びと幸せ感（Well-Being）が謳われ、発達段階を踏まえた児童・生徒の主体性を育てるため、対話的な話し合い活動等の学習活動の充実や道徳性に係る成長の様子を個々に勇気付け、励ます多様な評価を工夫することが求められている<sup>(6)</sup>。現在、新型コロナウイルス禍や東日本大震災等に対して、健康安全を堅持できる日本の未来社会の在り方が問われている。Society 5 社会でも人間教育が重要であり、主体性や人間性を育てる新しい道徳科の教育理念を分かり易く掲示したいと考えてきた。所属職員への啓発を踏まえた上で、具体的な道徳科授業や道徳科教科書の価値、全教育活動における道徳教育の在り方等について、簡潔な広報活動の展開も求められている。

## 第2章 研究の成果と現状分析

私は、中学校の教員・校長・行政職として、学校経営の重要な視点は学力向上と生徒指導と考え、更に道徳性の育成の観点を組み入れたカリキュラム・マネジメントの構築が一定の成果を生み出すと考えてきた。そして主体的・対話的で深い学びができる生徒の育成

は、問題解決的な道徳科授業の開発と連動して開発されるべきであることを以下に示すよう実証した。教員・保護者・地域社会・そして生徒自身による本課題の取組みには一定の成果があったこと、また現在も継続している研究実践を提示する。そして本研究成果の更なる改善として、道徳科の学習指導過程の終末における生徒の道徳的価値の価値観の統合の工夫について述べる。

## 第1節 研究の経過と現状

東京都北区立飛鳥中学校の教育ビジョンは生徒の主体性の育成が中心軸である。更に主体性は、問題解決能力と道徳性を養うことと連動し深まっていくことを約8年間、次の研究テーマを掲げ、成果検証に努めた。現在も共同研究という形で新しい道徳科の学習指導過程の開発を中心に継続している。

### <研究の経過>

○平成 24～27 年度：問題解決型授業を活用した主体的な学習能力と自己評価能力の育成～小中一貫教育を活用した教科・道徳指導（4ステップ・メタ認知）～

○平成 28 年度：アクティブ・ラーニングを活用した実践力のある問題解決能力の育成～考え・議論する各教科と道徳科授業の開発～※主体的に学ぶ意欲を生み出す指導過程開発。

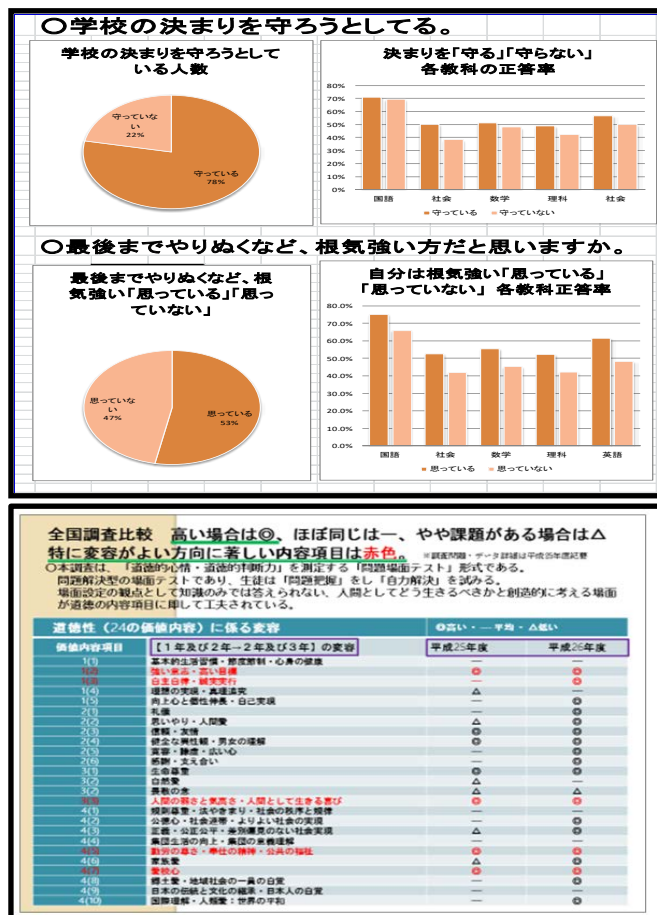
○平成 29～31 年度：主体的・対話的で深い学びを実践できる生徒の育成～問題解決的な教科及び道徳科の学習を通して～※H29 年度文科省国政研学習指導実践研究協力校（道徳）、東京都道徳教育推進拠点校、北区教育委員会研究指定校（全教科・道徳科）

○令和 2 年：主体的・対話的で深い学びを実践できる生徒の育成～道徳科と教科等のカリキュラム・マネジメントの構築～

## 第2節 道徳性の向上と「問題解決能力に関する意欲×学力」に関する調査研究

右図は、2014（平成 26）年度：中学第2学年生徒・東京都学力・意識調査における「学習や活動を支える生活習慣・やり抜く強い意志×学力」のクロス集計結果の一例である。約 20 項目の中で「規範意識×学力」「レジデンス（粘り強い意志や意欲）×学力」を取り上げてみると、統計的に正の相関があった（有意水準 5 %）。また教研式新道徳性検査（HUMAN III）、学習適応性検査 AAI(Academic Adjustment Inventory)を、2015・2016（平成 28・29）年度2年間の経年で調査を実施した。全体としてよりよい変容が見えた。

特に、問題解決能力の基盤でもある道徳性に関わる「強い意志・高い目標」「自主自律・誠実実行」、更に「人間として生きる喜び」「勤労・奉仕・公共の福祉」「愛校心」に高い変容があった。また AAI 調査では、「自分で主体的に考



えたことをまとめ・整理し情報を比較・統合する力」の向上を測定した。

結果の一例としては、2016（平成 29）年度、中学 3 年生全国学力調査：活用 B 問題では、全国平均を国語科 9.0 点、数学 10.6 点上回った。現在も活用問題は平均を約 10 点上回っている。

### 第 3 節 主体性を軸に問題解決能力と道德性の育成のカリキュラム・マネジメントの実現

#### 第 1 項 生徒の主体性を生かす問題解決型 4 ステップ授業構想の開発

生徒の主体性を生かす指導過程として「飛鳥中学校問題解決型 4 ステップ授業構想」を開発し、2020（令和 2）年度現在も学習指導過程の改善を図り、継続研究を実施している。成果は、全授業で対話的な話し合い活動が充実し、思考の深化が観察できている。また東京都教育委員会は、同型の学習指導過程を「東京学習方式」<sup>(7)</sup>とし推奨し、リーフレットの作成で啓発を試みている。

生徒が常に知的好奇心を大切に、自分で問題を発見し、自分で考え、仲間と語り合い、そして自分の考えを追究し、たくましく生き抜いていく人間を育てたいと考えてきた。学校マネジメントとして、授業と共に学校行事、生徒会の自治活動、部活動等でも積極的に主体性を育む教育活動を試みた。汎用性のある学校マネジメントの実現に向けて、主体性の育成を軸に、問題解決能力と道德性の育成というカリキュラム・マネジメントを心掛け、教科等について横断的で汎用性のある問題解決能力の育成を目指して、研究授業と授業改善を繰り返している。教科等の見方・考え方による授業改善は、やがて汎用的に学校・学年・学級マネジメントや生徒会自治活動そして部活動等の指導マネジメントにも応用され広がっている。

#### 第 2 項 主体的な学習と深い学び道德性の育成を図るカリキュラム・マネジメント

主体的・対話的で深い学びを実践できる生徒に関する「深い学び」を各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせた 3 点①解決 ②形成 ③創造とし、成果検証を実施。

①「解決」事象の中から自ら問いを見いだし、課題の追求、課題の解決を行う探求の過程の取組。②「形成」精査した情報を基に自分の考えを形成したり、目的や場面、状況等に応じて伝え合ったり考えを伝え合うことを通して集団としての考えを形成。③「創造」感性を働かせて、思いや考えを基に豊かに意味や価値の創造。2016（平成 28）年 7 月～2017（29 年）7 月、上記の深い学びの 3 点と次の 3 点の項目をすべてクロス集計し、統計的に有意差のある項目を分析した。

※研究紀要参照<sup>(8)</sup>

調査項目は、(1)主体的な学びに関する自己評価アンケート～主体力・協働力・創造力・決定力・解決力・成長力～(2)自尊感情測定尺度アンケート～自己評価・自己受容、関係の中での自己、自己主張・自己決定～(3)学習マネジメント能力アンケート～学習習慣・生活習慣・自律心・自己学習力・自己マネジメント力・生涯学習力・自己成長力～<sup>(9)</sup>とした。これは主体的な学びは、生徒の学びと意欲の根本として自尊感情や自分への確かな自信、他者への貢献の心等とリンクするという仮説による。また問題解決的な道徳科授業とカリキュラム・マネジメントの実地で、次の図は成果例の一部である。

※クロス集計 1 %水準で統計的に有意差があり、解決力は数年単位で向上している。

○飛鳥中学校問題解決型学習の 4 ステップ  
☆指導案等では、口名称で示した

① **問題把握**  
第 1 段階として、生徒が主体的に考えて、問題を発見したり、把握したりする。提示された課題から自分で問題を認定するか、最初に問題として認定したものを自分で把握する。

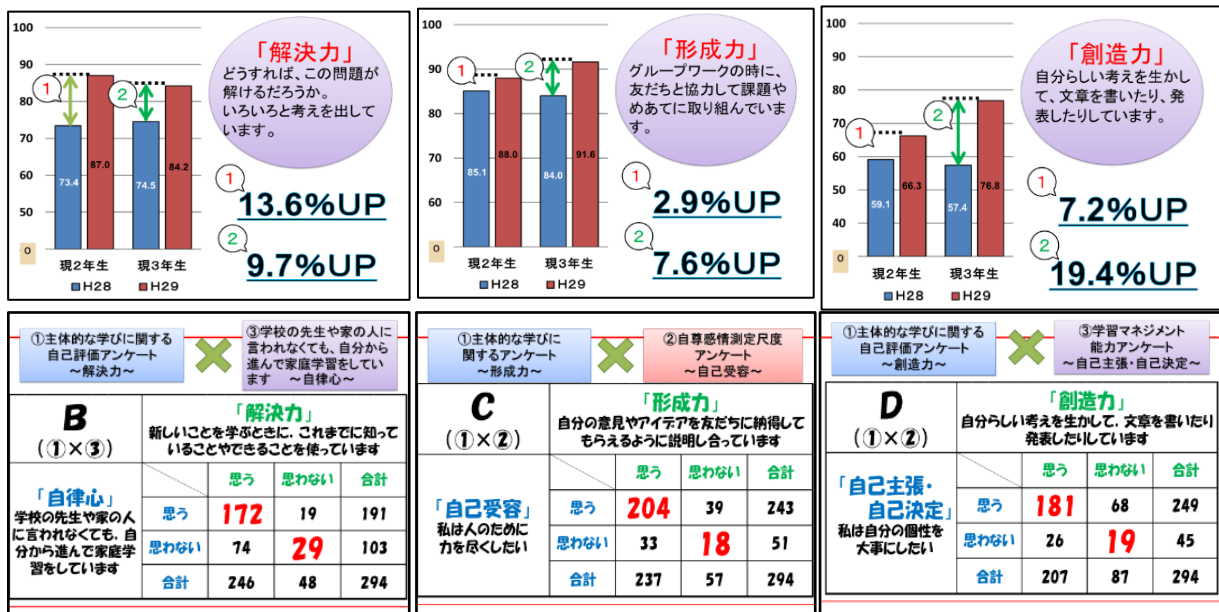
② **問題の自力解決**  
第 2 段階として、既習事項等を基に、問題を主体的な学習能力を駆使して自分で解決してみる。

③ **問題の全体検討**  
(集団討論・意見交換)

★今年度重点指導  
第 3 段階として、あらゆる方法を駆使し、多様な他者の意見を聞き、討論等もしながら、よりより問題解決に至る。

④ **問題のまとめ(個人として)**  
最終段階として、個々の生徒が自分として、問題解決のまとめをする。





### 第3章 問題解決型授業を活用した主体的な学習能力の育成

道徳科や各授業では、生徒にとっての問題発見があり、「見つけた」「なるほど」「分かった」など感動や達成感を重視してきた。説明中心の授業から脱却し、生徒の自ら学ぶ意欲や知的好奇心を喚起することから、真に身に付いた質の高い学力育成のための具体的な授業として問題解決的な道徳科及び教科等の授業があると考え、研究のねらいを2点定めた。

#### ねらい1 道徳科及び教科等における主体的な学習能力及び態度の育成

今日、教えることと学ぶこととについては、バランスのある指導が大切とされているが、実態は不十分である。そのため主体的な論理的思考や学習習慣の習得等を基礎基本として徹底した。そして年間計画でバランスを取りながら、問題解決的な授業を積極的に取り入れた。これは、道徳科、教科等すべてで実施した。

#### ねらい2 豊かな心等の道徳性にかかわる問題解決能力の育成

豊かな心等の道徳性を、学習指導要領の価値内容の主体的な自覚と考えた。内容項目の育成は豊かな人間性の基盤と考え、すべての教科や領域で育てるべき教育の価値といえる。問題解決的な道徳科授業では、特質を踏まえ、行動の判断や善悪の判断に終わることなく、十分に自分を振り返り(=メタ認知)、自分は人間としてどうあるべきかと考え、時には悩み苦しむながら判断していくような問題解決能力を育てたいと考えた。メタ認知能力は、新しい観点別評価「学びに向かう力・人間性等」の主体的に学習に取り組む態度の一つの構成要素として、レジリエンス(粘り強く学習に取り組む態度)と共に、自己学習調整能力として注目されている観点である。

#### 第1節 主体的な学習態度は、深い学びや道徳実践へ発展

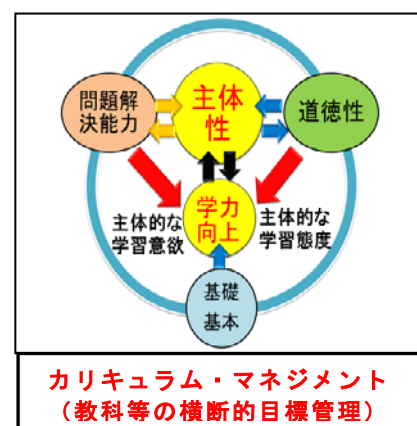
生徒がアクティブ(主体的・能動的)にラーニング(学習)し、実践力を培う学習指導過程が主体的な学習態度を生み出す。道徳科授業では、生徒は教材の問題を主体的に発見・熟考し、更に仲間とペアやグループで考えを出し合い・議論をする。常に自分の問題として、自己を振り返り考えを深める。このような主体的な学習態度は、生徒個々の深い学びだけでなく道徳実践に発展している。例えば、右図のように、生徒会が目に見える支援を掲げ、企画提案



から東日本応援バザー「あすか祭」が実現した。毎年9月第1土曜日に、保護者・PTA・おやじの会・町会等の地域組織と合同運営している。現在、近隣小学生や幼児・保護者が約3,000人集まるものに発展している。道徳的な実践としては、東日本大震災の防災拠点校である宮城県岩沼市立玉浦中学校と交流・支援奉仕活動を8年間続けている。「飛鳥中は、玉浦中を決して忘れない！」を合い言葉に、支援バザーの売上から追悼記念樹植樹等を毎年送っている。道徳性と主体的な学習態度は、実践として地域社会へ開かれたものに発展している。体験的な道徳実践は生徒の道徳的価値を人間の生き方として統合していくことも分かったのである。また現在、情報モラル等に係わる規範欠如の問題行動が続出し、学校における道徳科授業の機能が十分でないという指摘がある。また生徒が人間として主体的に問題意識を抱き、自ら問題解決を図っていく態度の育成が不十分とも言われる。教育再生会議や道徳教育の充実に関する懇談会、中央教育審議会等で議論が重ねられ、平成29年度告示の学習指導要領「特別の教科 道徳（以下、道徳科）」では、いじめの根絶・規範意識の育成や安全確保・持続可能な社会等の喫緊課題が道徳科の教科書検定基準として提示された。これは「考え・議論する道徳科」として、生徒の実態に即した主体的・対話的で深い学びを重視した実践力を伴う問題解決的な能力育成や主体的な実践意欲や態度への期待である。実は本中学校では当初、健全育成の課題を抱え、今は見られないが授業の抜けだし、喫煙や器物破損も続いた。授業も活気が無く居眠りの生徒も多く、教員は日常の対蹠的な問題に追われ疲弊していた。しかし学年や個々の教員にヒアリングを実施すると、ワクワクドキドキするような魅力的で楽しい授業や温かい人間関係に溢れた学校生活により生徒は必ず主体的で意欲的に学ぶはずと強く望んでいることが分かった。生徒達やPTA役員等の保護者の声も同じであった。そこで新しく目指す学校カリキュラム構想の中心を、生徒の主体的な学習意欲や態度を生み出す学習指導過程の開発、温かい人間関係に根ざした道徳性の育成とした。そして生徒の主体性や自分で考え仲間と議論できる主体的な学習を組み入れた教科等横断的なカリキュラム・マネジメントを構想し、人間育成を実行していくことにしたことが動機になっている。

## 第2節 考え、議論する道徳科を中心に、チーム学校で組織的に学校を変える

中学校は教科担任制であることから、教科等の横断的な指導体制が重要である。そこで学校マネジメントとして、主体的な学習態度から道徳実践ができる内面の資質・能力の基盤である豊かな道徳性の指導開発を最初に試みた。しかし急がば回れである。道徳が教科化になっても不易の授業の特質がある。道徳科授業の特質は、①計画継続的・発展的な指導、②各生徒の道徳的価値の自覚、③道徳性の内面的資質・能力の向上、④補充・深化・統合等である。自己の生き方を考え、人間としての生き方について自覚を深め、他律から自律へと向かう主体的な学びが求められている。そこで道徳科授業の充実とともに、教科等横断的なカリキュラム編成を工夫し、汎用的な能力育成の根幹として「主体的な学習態度の育成」の開発を喫緊課題とした。生徒が教材や日常の生活体験から多様な問題を発見し、自分の問題として、主体的に考え議論し、更に人間として自分の生き方・在り方を熟考し深めていくような「考え・議論する道徳科授業」の指導を日々積み重ねている。



### 第3節 主体的に考え、議論する「問題解決型4ステップ学習指導過程」の精度の向上

開発してきた授業構想は、「問題解決型4ステップ学習指導過程」を中心に、現在も精度を高めるべく、多様な授業実践を繰り返している。生徒が主体的な学習態度で、生き生きと問題発見・問題追求ができる問題解決的な道徳や教科授業、主体的な学びや話し合い活動ができる学習指導過程を特に継続研究している。特に新しい学習指導要領の目指す資質・能力の中心である「**学びに向かう力、人間性等**」の育成を目指し、「**主体的に学習に取り組む態度**」や「**人間としての生き方を考える**」ための授業転換を図っている。

中学生が他律から自律へ向かうためには、考え、議論でき、対話的な話し合い活動が重要である。学校のカリキュラム・マネジメントとして主体的な学習態度に結び付く自分で考える学びと問題解決能力、道徳性の育成の価値が大切と考えている。

### 第4節 道徳科の学習指導過程に見られる主体的・対話的で深い学びの実際

毎年のように起きる大災害は日本人として避けられない問題である。道徳科教科書の検定基準としても、健康・安全は持続可能な社会の実現と共に明記された内容である。

#### 第1項 生徒が自分事として問題解決を図った道徳科授業の実際（令和元年10月）

- 1 主題名 節度・節制の大切さ 対象学年：中学2年
- 2 内容項目 A 節度・節制
- 3 教材名 避難所にて 「あすを生きる2」 日本文教出版株式会社
- 4 主題設定の理由

内容項目「A 節度・節制」の道徳的な価値を生徒が深く自覚するためには、取り扱う教材が自分事として捉えられ、実践意欲や態度にむすびつく必要がある。「～だから、～するべき」という理解だけでは、実践に結び付かない。道徳科教科書検定基準「健康・安全」に係る東日本大震災の中学生達の言動を通して、深く自分事として考えられた事例である。  
(1) ねらいとする道徳的な価値について

地震や風水害など大きく自分の日常生活を変えてしまう出来事に見舞われるケースが増えている。その状況下では他人の生き様を目にするので自分自身の生き方を見直す機会が多い。節度ある生活を送るとか節制を心がけるとか真剣に考える場面が否応なしにでてくる。望ましい生活の大切さを自覚し実践する思いを感じとらせることができる。

(2) 生徒の実態について

活力と意欲に満ち溢れ積極的な行動をとる反面規制やルールを嫌う傾向もみられる。しかし、他の人の行動や考えを参考に自分を振り返ることができる生徒が多いのでこれまでの成長の過程で培われてきた基本的な生活習慣を振返らせることを通して、節度・節制に心がけることが自分自身の生活を豊かにするものであることを自覚させたい。

(3) 教材について

本教材は、阪神・淡路大震災で避難所生活を余儀なくされた人々の生活を取り上げ、日々の生活を送ることができにくい状況で力を合わせることが生きる上で欠かせないことに気付く中学生の思いについて考えさせるものである。身の回りに多くのボランティアの活動者が自己の生活を止めて神戸の人々の応援に駆け付けたことと自堕落な日々を過ごす私を比べ節度ある生活が大切なことに気付かせることができる。

#### 5 ねらい

節度ある生活や節制に心がけるために、周りの人の生活を見つめることで自分の生活を見直し、思慮深く内省しようとする道徳的態度を育てる。

## 6 学習指導過程

	学習活動	主な発問と予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入 5分	1 災害時の奉仕活動について考える。	【発問1】この話の『問題』について、各自で、考えてみよう。 <b>問題把握</b> <b>自力解決</b> ・多様な思い・思いと行動のギャップの迷い	・現中学生はまだ生まれていない。 ・身近な震災等から辛さや個人生活の難しさを理解させる。
展開 40分	2 教材「避難所にて」を読み、内容の問題点と主人公達の実践意欲を考える。 ★まず自分の考えを確かめる。 3 ペア及び4人の議論 ※15分  4 話し合いや議論から、自分を深く見つめ、振り返る	【発問2】「よろずボランティア相談所」に居づらくなくて、私たちがその場を離れたのはなぜだろう。 ・見ず知らず人のためにできる事があるのか。 ・何もしないで炊き出しを食べてもいいのか。 ・毎日だらだら過ごしていて、恥ずかしい気持ち。 【発問3】弟がポリタンクを運んでいる姿に、「私」が心を揺さぶられたのはなぜだろう。 <b>自力解決</b> ・弟はどうして自分から進んであの思いポリタンクを一生懸命に運んでいるのだろうかと考えた。 ・だらだらと生活を送っていてこのままでいいのだろうかと思った。 ◎【発問4】「私」たちが避難所の皆さんへの貼り紙で伝えたかったのはどんなことか。話し合ってみよう。 <b>集団検討</b> ・避難所での大変な生活の中だけれど、少しずつでも日常を取り戻していききたい。 ・共に力を合わせる事が状況を乗り越える。 【発問5】調和のある充実した生活を送るために、大切なことをまとめよう。 <b>自分でまとめ</b> ・自暴自棄にならず一緒に危機を乗り越えねば…。 ・みんなが節度を守って生きることが大切。	★飛鳥中問題解決型授業で展開 ・ボランティア活動が自分たちで必要なものを準備するなどの困難さや責任の重さを理解させておく。 ・大勢のボランティアががれきを片付けている姿と昨日までの自分たちの生活を対比させながら考えさせていく。 ・「私」たちが作成した注意書きを一つ一つ意識させることで子供たちの思いを深めさせていく。
終末 5分	5 歌「しあわせ運べるように」から各自の思いを深める	【発問6】歌「しあわせ運べるように (CD)」にはどのようなメッセージが込められているだろうか。 ※今日の学習から、自分を更にプラスに捉える前向きな発見を「自分にプラス1」として、まとめよう。	・「しあわせ運べるように」の歌詞を自分事として考え自分にプラス1。

## 7 評価

(1)ねらいについて：困難な状況を乗り越え生活するために力を合わせることに気づき、自分もそうした生き方を大切さにしていこうとする発言や記述が見られたか。

(2)指導方法について：写真や映像等の教材を提示することで、当時は幼くて何もできなかった人々の思いやボランティア活動に従事した人々の思いに共感させることができたか。

## ○ 考察

東日本大震災は現在の中学2年生は小学校入学前。阪神・淡路大震災については過去の



歴史として学ぶ世代である。そのため学習指導過程の導入では、大震災等の災害や防災の写真等で実際の中学生等のボランティア活動を紹介する丁寧な導入が必要であった。大震災への日頃の心構えなどについてどのような経験があるか、生徒同士の考えを共有しながら、本授業で求められる道徳的な価値を考えていく導入が特に大切である。ねらいである節度ある生活や節制に心がけるために、自分の生活を見直し、思慮深く内省しようとする道徳的な態度を意識させていた。展開では、覚悟や決意がないとボランティア活動を実行することは難しいことを知ることができ、主人公たちが具体的に何をきっかけに何を実行しようとしたのか、自分の問題として考えさせ、ペアやグループで話し合いをすることが必要であった。主人公たちがよろずボランティア相談所を後にしたことから、ある生徒は「実際の大震災では、どのようなボランティアができたのか。」と担任に聞き返した場面もあった。また弟の姿に心を揺さぶられた理由を考えながら行為へのきっかけについて話し合う姿があった。弟がポリタンクを運んでいる姿に「中学生ならば積極的な行動がしたい。」「避難所の運営を手伝う気持ちをもちたい。」と前向きな意見も多数あった。更には、支援バザー「あすか祭」の意義や実際の大災害で自分達中学生が実際にできることについても議論がなされた。避難所の貼り紙について考え話し合った内容は、「確かに節度ある生活や節制と調和のある生活の大切さを促す大切さは分かるが、避難所の一人一人に声かけをしたい。」「もっと積極的に人々と触れあっていきたい。」という発言があり、ねらいとする価値から自分の生き方として考える主体的な態度や人としてどう生きるべきかという自分の統合の様子が見えた。また自分の実行したい意欲と実際の行動の難しさについて、実践への悩みは誰でも同じだと皆と確認できたと発言した生徒がいた。しかし道徳ノートには、「少しでも自分が納得できるような行動をしたい。そのため何が大切か、自分の今の生活も振り返り考えていきたい。」という記述が道徳ノートにあった。視聴した歌「しあわせ運べるように」は 1995 年の阪神・淡路大震災後に神戸復興を願い当時神戸の小学校音楽教師が作詞・作曲された楽曲。歌詞は「地震にも負けない強い心をもって…毎日を大切に生きていこう」等、希望や絆の大切さが分かり易く心に響く。災害時の実践への決意、健康で生き抜く節度・節制の生き方について余韻を感じながら口ずさむ生徒がいた。

## 第2項 生徒が自ら問題を発見し、深い学びに至る道徳科授業の実例（令和2年6月）

本事例の価値は、教材に内在している問題を発見する飛鳥中の問題解決的な道徳科授業の事例である。※深い学びの3視点の内①解決と③創造の2つの視点による

- 1 主題名 武道家の姿から『強き心』を学ぶ 内容項目 B 礼儀 対象学年：中学3年
- 2 教材名 礼に始まり礼に終わる－アントン＝ヘーシンク 「私たちの道徳」文溪堂
- 3 主題設定の理由 ねらいとする道徳的価値及び生徒の実態は略

本教材は、第18回東京オリンピックでの神永昭夫選手とオランダのアントン＝ヘーシンク選手の柔道無差別級決勝戦による。当時は4階級制で、3階級で日本は金メダル。残る1階級をとれば日本の全階級完全制覇がかかった最後の階級無差別級。日本の期待を一身に背負って大会に臨んだ神永選手。しかし残念ながらヘーシンク選手に決勝で敗れてしまう。勝ちが決まったヘーシンク選手にオランダ関係者が駆け寄ろうとした時、ヘーシンク選手は来ないように制止をする。畳を降りるまで礼を重んじるヘーシンク選手の姿勢から「真に礼儀を重んじる」ことは生き方そのものであることを伝えたい。特に試合後の2人の後日談を紹介し、勝者と敗者の双方の気持ちを考え、議論することから、誇り高い行動や柔道を通して培われた「強き心」を深く学ぶ機会とする。

#### 4 主な発問と生徒の主体的・対話的で深い学び

発問1は、展開の導入で、前時のヴァイオリニスト千住さんの挫折と栄光について振り返った。次に1964年の東京オリンピックの決勝の日本代表の神永選手とオランダ代表のヘーシンク選手を紹介。日本国民注目の中、栄光をつかみとった勝者と負けて挫折を味わう敗者。優勝選手のヘーシンクが駆け寄る関係者を制する映像が見える。発問2（中心発問）は、担任が丁寧に聞く。「ヘーシンクがオランダ関係者を制止したのは、ヘーシンクの何らかの思いがあったからですね？また制止されたときのオランダ関係者もその時に何かを感じたと思いませんか？他にもその光景を見て何かを感じた人はいませんか？」ここに見える問題把握を生徒は自分で主体的に考え、やがて対話的にペアとグループで考えていく。そして、ヘーシンクが後で日本選手団を訪れ、育ててくれた日本にすまないと謝罪。神永は勝敗に国は関係ないとお互いに健闘をたたえ合うというエピソードを紹介。このため、生徒達は人間の素晴らしさをより深く学ぶ。終末では、「ヘーシンク選手や神永選手の生き方を通して学んだことを、今後のあなたの人生でどのように生かしていきたいですか？」と発問。生徒は、前回の東京オリンピックへの単なる興味から、勝者敗者という枠を超えた人間的な選手のエピソードに人としての生き方を深く考えていく。また仲間の多面的・多角的な考えを対話的に知り、深く学ぶことができ、更に自分の生き方を振り返り、主体的に考えた事例である。

#### ○ 考察

2回目の東京オリンピックが新型コロナウイルス禍で延期となった。道徳科の授業も十分確保できない。内容項目は「国際理解、国際貢献」でも展開できるが、今こそ世界の中の日本人の在り方として、深い学びの実践として仲間と議論できた有意義な授業になった。内容項目の礼儀を自分の生き方の問題として統合していく姿勢も見えた。

### 第4章 まとめと課題

問題解決的な道徳科によるカリキュラム・マネジメントの構築は、教科等との連携、地域社会との共同の東日本支援バザーの主体的な企画・運営等の道徳実践にむすびつくことが成果として分かった。特に主体的・対話的で深い学びにおける深い学びの3視点として、①解決 ②形成 ③創造については、道徳的価値である自律心、社会貢献として自己受容、自分の個性を大切にしたい自己主張・自己決定との正の相関を測定・検証できた。また学校経営として、道徳科と各教科等の汎用的なカリキュラム・マネジメントの構築から生徒の主体性の育成を促すことが分かり、人としての生き方として統合する姿も見えた。

課題としては、生徒がより主体性を発揮できる研究目的に帰する道徳科の教材開発や道徳実践の成果検証を継続的に実行する必要がある。

#### 【註 引用文献・参考文献】

- (1) 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（2016.12.21）  
中央教育審議会教育課程部会総則・評価特別部会 資料3-1（2016.5.23）
- (2) 道徳教育の充実に関する懇談会（報告）～新しい時代を、人としてより良く生きる力を育てるために～（2013.12.26）p.12
- (3) 中央教育審議会「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」（2016.8.26）

- (4) 義務教育諸学校教科用検定基準 文部科学省告示第 105 号 (2017. 8. 10)
- (5) 小 (中) 学校学習指導要領第 3 章 特別の教科 道徳及び総則 (2017. 3. 31)
- (6) 中央教育審議会道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議  
「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について (報告) (2016. 7. 22) pp. 7-12
- (7) 「東京方式 1 単位時間の授業スタイル」リーフレット (2019. 4) 東京都教育委員会発行
- (8) 平成 29 年度研究紀要東京都北区立飛鳥中「主体的・対話的で深い学びを実践できる生徒の育成～問題解決的な教科及び道徳科の学習を通して～」(2017. 12. 25) 飛鳥中発行
- (9) 自尊感情測定尺度: 奈良女子大教授伊藤美奈子監修・都教職員研修センター (2015. 6. 15)  
アクティブ・ラーニング実践の手引: 早大院教授田中博之・教育開発研 KK (2017. 3. 30)

**Fostering Independent, Interactive and Deep Learning in Students  
～Improving Curriculum Management for Problem-solving Moral Education～**

**SUZUKI Akio**

**Keywords :** Subjectivity Proactive, Interactive and Deep Learning,  
Curriculum Management, Metacognition

**【Abstract】**

A new style of proactive, interactive and deep learning is being implemented in moral studies classes, and for this to succeed the development and enhancement of school management with an emphasis on curriculum management is required. This paper investigates the experience of a junior high school that has developed and improved general-purpose curriculum management for moral studies and other subjects for about 8 years, with the aim of developing students' independence.

Since the school's management wants students to think for themselves, talk with their peers, hold certain values, and pursue a particular way of life as human beings, we developed the "ASUKA Junior High School Problem-Solving 4-Step Learning Guidance Process" and obtained pleasing results by making repeated improvements in the teaching of moral studies and other subjects. In moral studies, the main thrust of the teaching material is now focused on encouraging students to seriously consider their own ideas and discuss them with others so as to deepen and expand their thinking in a multifaceted manner. The results to date show how moral values can be integrated into students' sense of values and put into practice using a persistent problem-solving approach.